

小説部門優秀賞

願い事

盛岡第三高校3年 小野光璃

リュックの肩バンドを握っていた手に、思わず力が入る。今日は職員会議があるとかで、いつもより早く帰れる日だった。嬉しいはずなのに、気持ちは晴れない。こんな言葉を、今日もかけられたからだった。

「同じ『ユウタ』なのにな」

ここ数か月で、この言葉をよく聞くようになった。

多田勇太は、運動も勉強もできない、落ち着いた雰囲気のカラスメイトだ。初めは俺と同じ『ユウタ』という名前であることにすら興味を抱かなかった。だけど、高校に入学したての頃に何となく話しかけてみたら、思ったより楽しい人だった。優等生とは話あわないかも、なんていう心配はすぐになくなって、休み時間にも度々話すようになった。

でも、最近は多田を見るたびに言いようのない感情が沸き上がるようになってきた。前までは目を見て真つすぐ話せたのに、今はできな。口を開いたら、多田を傷つける言葉を投げつけてしまいたい。意図的に会話をしないようにしていた。どうすればいいんだよ……」

思わず声に出してしまおう。リュックを背負いなおして、緩みかけた靴ひもを結びなおす。今だけでもこのことを忘れたくて、地面を蹴った。淀んだ空はどこまでも付いてくるようで、青空までは届きそうになかった。

家の中は静かだった。リビングの電気を付けたところで、今日は母さんが公民館に行く日だということを感じ出した。そういえば、近いうちに公民館でイベントがあるとか。まあ俺には関係ない。

テレビでも見ようか。お菓子も用意しなきゃ、とリュックを下したところで、ちようどスマホが震えた。母さんからのメッセージだ。

「えっと……本忘れたから持ってきて？」

きよろきよろと視線を動かすと、机の上に数冊本が載っていた。裏表紙にはバーコードシールが貼られている。

正直、面倒くさい。でも、ここで行かなかつたら、帰ってきてからさらに面倒くさいことになるのは目に見えている。面倒なことを先に終わらせるか、後に取っておくか。数秒間うなつてから、しぶしぶ本を手を取った。公民館は家の近くにある。歩いて十分もかからずに着いた。中はひんやりと涼しく、はしやぐ子供の声が聞こえてきた。母さんは図書館にいるはずだ。公民館に併設されている図書館はあまり大きくはないけれど、定期的

に読み聞かせやイベントを行うから、近所の

人たちからは人気がある。二階に上がり、「図書館」とプレートが掛けられている扉を開けた。母さんはカウンターで忙しそうに本を積み上げていた。

「母さん」

声をかけると、母さんは作業する手を止めて、俺の方を見た。嬉しそうに顔を明るくする。

「持ってきてくれた？」

はい、と本を渡す。

「ありがとう！ 期限今日までなのに、家に忘れて困っていたから助かったわ」

母さんは本を受け取り、上機嫌でバーコードを読み込んだ。今日も読み聞かせをしているのか、キッズスペースからは賑やかな声が聞こえてくる。

「あ、そうだ。これから暇でしょ？」

「暇だけど……」

嫌な予感がする。わずかに顔をしかめるが、そんなこと気にしないといったふうに母さんは続けた。

「今週末、七夕のイベントがあるって言ったよね。その準備の人手が足りなくて……。お手伝いしてくれない？」

面倒くさいことになった。断りたい。けど、真面目に頼み込んでくる母さんを見捨てることなんてできない。どうしようか悩んでいる俺を見て、母さんは顔の前で手を合わせた。

「お願いします。あとでお菓子買ってあげるか

「ら！」

「あーもう！ 分かった、やるよ」

「さすが優太！ ありがとう」

どうせ宿題は出てないし、家に帰ってもぐうたら過ごすだけ。こっちの方がずっと有意義だと自分に言い聞かせる。それに、家に一人いたらいろいろと考えてしまいそうだった。

「あ、この子手伝いますよー」

急いだ様子で横切ろうとした一人の女性を引き留めて、母さんは言った。女性は「助かるわ」と嬉しそうに笑って、俺に付いてくるように言う。母さんは頑張ってねと腕を振って見送ってくれた。

女性は一階に降りると、大きな笹の前で止まり、短冊を書いた人たちがここに来るから、それを飾って欲しいと言った。短冊を書くコーナーには子供が三人いて、おしゃべりしながら何かを書き込んでいる。女性は他の仕事があるらしく、何度もお礼を言ってから奥に行ってしまった。

すでに短冊は数枚飾られていた。短い願いごとと、名前が書かれてある。

「あ、裏返ってる」

陰に隠れている、ちょうど目線くらいの高さにあつた短冊を、くると表に向ける。そこにあつたのは不思議な言葉。

『お花が咲くところを見る』？

小さい子が精いっぱい背伸びして書いたように見える、まだ拙い文字。これを書いた子

は花が好きなのだろうか。左下にはユメカと書かれてある。

「願いごとというより、決意表明に近い。短冊は願望を書くものだと思っていたから、この短冊は斬新に思えた。」

「お兄さん！」

しばらく辺りをウロウロしていると、短冊を書いていた子供たちが、無邪気な笑顔を浮かべて、傍に寄ってきた。短冊を差し出して「お願いします」と口々に元気よく言う。それらを受け取り、笹に吊るした。短冊にはカラフルなペンで可愛らしい願いごとが書かれてあった。

「お兄さん、あのね、忘れ物あったよ」

はい、と一冊のノートを渡される。ピンク色の、可愛い表紙のリングノート。マスキングテープが貼られていて、その上に「ユメカノート」とある。

子供たちは、はしやぎながら三人で帰っていった。

「ユメカって……」

その字に見覚えがあった。さっきの短冊に視線を戻す。やっぱり同じだ。

「優太、順調？」

その時、後ろから声をかけられた。母さんだ。図書館での仕事がひと段落したらしい。「順調。というかほとんど何もしてないけど。」

あ、そうだ、忘れ物ってどうすればいい？「忘れ物は受付に届けばいいよ。あれ、それってユメカちゃんじゃない」

「知ってんの？」

母さんは頷く。

「今日もまだいるはず」

母親が公民館で働いていることもあり、ユメカちゃんも毎日のようにやって来るらしい。図書館にもよく来てくれて、たまに話す。三階の窓の近くのソファがお気に入りか。母さんから、今日もそこにいるのではないかと。母さんはそう教えてくれた。

「まだ小さいのに、難しい本を借りていくの。優太も見習いなさいね」

「うるさいなあ」

むっとして言い返すと、母さんは肩をすくめた。

「そのノート届けたら帰っていいよ。じゃあね」
母さんは一方的にそれだけ言うと、忙しそうにパタパタと階段を上がっていった。知り合いなら母さんが届けてくれればいいのにと文句を言う暇もなかった。

「えつと、三階だっけ」

午後五時を過ぎた公民館からは、子供たちの元気な声が、いつの間にか消えていた。階段ですれ違う人もなく、自分の歩く音しか聞こえない。明るい公民館しか知らなかったから、少し気味悪く感じられた。

三階についた。心なしか、下の階より暗い気がする。初めてきた場所だ。何があるんだろうと周りを見渡すと、窓の近くにいる女の子と目が合った。じつとこっちを見つめてくる。窓から差し込む夕日が、女の子を照らし

ていた。

「……ユメカちゃん？」

女の子は不思議そうに眼をパチパチとさせ
たあと、頷いた。

「よかった。これ、忘れ物」

ノートを見せると、ユメカちゃんは自分の
バックをあさってから、駆け寄ってきた。

「私のだ！　ありがとう！」

ユメカちゃんは、嬉しそうにノートをぎゅ
っと抱きしめた。

「なんのノートなの？」

気になって聞いてみると、ユメカちゃんは
自慢げに教えてくれた。

「ここにはね、自分の夢を書くの。そうすると
叶うんだ！」

「え」

ユメカちゃんは、嬉しそうにノートを開い
て俺に見せてくる。

ノートには、お菓子を買う、本を買う、公
園に行くなど様々なことが書かれてあった。

しかし、どれも夢と呼ぶには小さい気がす
る。

「名前はなんていうの？」

ユメカちゃんはノートを閉じて、俺の顔を
覗き込んできた。

「優太だよ。渡辺優太」

優太くん、と確かめるように呟いたあと、
ユメカちゃんは首を傾げた。

「優太くんは短冊書いた？」

「あー、書く気なかったな」

「そんなのだめだよ！」

ユメカちゃんは信じられないとでも言いたげに、目を丸くした。

「七夕なんだから、お願いごとしなくちゃ！きつと、どんなことだつて叶うよ」

純粹な視線と言葉が刺さる。

最後に短冊を書いたのは、確かユメカちゃんくらいだから、小学校低学年のときだ。それも学校でイベントがあつたから書いただけ。ユメカちゃんと違って、七夕を特別意識したことなんてない。自分の夢と向き合っているユメカちゃんが、少しだけ眩しく見えた。

「優太くん、ほら、行くよ」

「え、行くつてどこに？」

ユメカちゃんはやる気満々そうに、階段のところまで振り返った。

「短冊、書きに行こう」

そう言つて、一人で階段を下りていく。反響する足音が止まったかと思つと、俺のことを急かす声が聞こえてきて、慌てて後を追う。

ユメカちゃんは意外とすばしっこくて、止める間もなくすぐに一階に着いた。

しかし、机の上に設置されていた短冊を書くセットはもうなかつた。

「二足遅かつたみたい……」

ユメカちゃんは肩を落として、あからさまに落ち込んでいた。もう子供もいないし、必要ないと判断されたのだろう。実公民館には勉強をしにきた学生たちが増えてきていた。

「優太くん、明日ひま？」

ユメカちゃんはその問いかけてくる。明日もなにもないはずだと頷くと、ユメカちゃんの顔がパツと明るくなった。

「明日もここにきてよ。優太くんと、もっとお話ししたいの！」

慣れない真つすぐな言葉に気圧されて、コクリと首を縦に振ってしまふ。すると、ユメカちゃん満足そうに、心底嬉しそうな笑顔をを見せてくれた。

「あ、ママだ！ 優太くん、またね。ちゃんと何書くか考えるんだよ」

ユメカちゃんはそう言い残し、手を振っている。優しそうな女の人のところに駆けていく。声をかける暇もなかった。二人は仲良く手をつないで、公民館から出ていった。

本を届けにただけだったのに、結構時間が経った。それに、明日も来なければいけない理由も出来てしまった。面倒くさいはずなのに、嫌な気持ちにはならない。短冊に書くこと、決めなきやな。

やってしまった。多田に話しかけられたのに、何も言わないで逃げるように教室を飛び出してきてしまった。教室には数人しか残っていないなくて静かだったから、無視したことが余計伝わってしまったはずだ。

最近本当にダメだ。あの台詞も、いつもなら笑ってふざけ返せるのに、今日は少しも自然な間が開いてしまった。胸を覆うモヤモ

ヤガ、増えていく気がする。

今日は、直接公民館に向かった。

公民館に一步足を踏み入れたところで、

「あ！」と嬉しそうな声が耳に届いた。ユメカちやんが、笹の前で大きく手を振っている。手を振り返すと、もつと元気よく振り返してくれた。

「考えてきた？」

ユメカちやんは短冊を書くコーナーの椅子に座って、書く用意をしてくれる。俺も隣に座って、荷物を地面に置いてから、出してくれた赤色の水性ペンを手に取った。

「考えてきた、考えてきたんだけど……」

昨日の夜、ちやんと考えたのだ。考えると、いうよりは、そのことを書く覚悟を決めた、の方が近い気もするけど。でも、手が動かない。

「なんでもいいと思うよ。大きなことでも、中くらいのことも、小さなことでも」

ユメカちやんは両手を使い、輪をどんどん小さくしていく。ジュエスチャイをする。

「大きさはどんなでも、その人にとったら大事なことなんだから。せっかく叶えてもらおうんだ。だったらさ、一番叶ってほしいこと願うしかないよ」

パツと手を広げて、ユメカちやんはいたずらっ子のような笑顔を浮かべた。

一番叶ってほしいこと。

短冊に向き合って、ペンを握りなおした。薄い黄色をした長方形の紙に、文字が書かれ

ていく。

「話せるようになりたい」

ユメカちゃんが読み上げる。途端に恥ずかしくなつて、思わず短冊を裏返した。

「こういうのは読むもんじゃ……」

言いかけて、そういえば自分もユメカちゃんのものを見たことを思い出した。そうだ、ずっと気になつてたんだ。

「ユメカちゃんの短冊に、花が咲くところを見るつて書いてたでしょ。花好きなの？」

「お花は好きだけど、そういうことじゃなくて。あれはね」

ユメカちゃんは視線を窓ガラスに移した。釣られて、俺も窓の外を見る。こここの大きな窓からは、手入れの行き届いた中庭が見える。外は、五時前にしては少し暗めだ。目を凝らすと、雨が降つていた。

「傘持つて来てないな」

そう呟くのと同時に、ユメカちゃんは弾かれたように立ち上がった。そのまま、階段向かつていく。突然の行動に驚いて、短冊とユメカちゃんとの背中とを交互に見る。少し考えた後、机の上のものを箱の中に入れて、短冊をポケットに突っ込んだ。乱暴にリュックをつかみ、背中を追いかけて、階段を駆け上がる。

ユメカちゃんは三階に飛び込むと、昨日と同じ窓に張り付いた。

「ゆ、ユメカちゃん？」

ユメカちゃんは視線を窓の外に固定したま

ま、手招きをする。何事かと近づいて窓を見てみるが、何も変わったことはない。

「見て、あの人」

指さす先にいるのは、制服を着た男子高校生だ。彼はその場に立ち止まり、リュックの中から何かを取り出した。それが伸ばされたところで、やつと折り畳み傘であることに気が付いた。

ユメカちゃんは真剣な表情で、彼の一連の流れを見ていた。

もう一度彼に視線を戻すと、ぱつと傘が開かれるところだった。黒い傘だった。すると、後ろから傘を差した数人が彼に駆けよって、一気にカラフルになった。表情はまったく見えないけど、楽しそうなのは伝わってくる。しばらくすると、彼らは見えなくなった。

ユメカちゃんは満足そうだ。

「短冊に書いた『花』っていうのはね、傘のことなの」

窓の外を見ながらユメカちゃんは続ける。

「ここにいると色んな景色が見えるでしょ？ その中でも、傘が一番きれいなもの。だから傘が開く瞬間が見たくって。でも学校でそれ言ったら、変だって言われちゃったから、書き方変えてみたんだ。変かなあ？」

えへ、とユメカちゃんは恥ずかしそうに笑った。

「全然。すごくいい夢だと思う」

心から出た言葉だった。俺は傘をきれいだと思ったことはない。それは、傘というもの

をしつかり見たことがなかったから。でも、今見た光景は、確かに良いものだった。「自分が夢中になれるものがあるって、いいと思うよ」

そっかと呟いて、ユメカちゃんは俺を見上げた。

「でもさ、傘ってお花みたいだと思わない？だって空から水が落ちてきたら、たくさんの色で咲くんだよ」

そんなこと考えたこともなかった。また視線を窓の外に移す。

三階からだとはよく分からなかったけれど、あの小さく折りたたまれていた傘が開かれた瞬間、水が弾かれたはずだ。想像した光景が、雨に打たれても凜としたままの花と重なる。確かに似ている。

花卉をつたつた雫がやがて名残惜しそうに地面に落ちる。そんなきれいなことが、今まで自分の傘で起きていたかもしれないと思うだけで、胸が高鳴るのを感じた。

もしも、この見下ろした景色が全部傘で埋め尽くされたなら。ユメカちゃんが見たいと強く願うのが分かった気がした。

「そういう考え方できるのもすごいと思う」
「えへ、ありがとう」

ユメカちゃんは近くにあつた椅子に腰をかけた。「ほら、優太くんも」と言われて、隣に座る。

「私ね、話くらいなら聞けるよ」

驚いてユメカちゃんの方を見ると、小さく

笑ってポケットを指した。ポケットからは薄黄色の紙が飛び出していた。

「書いてるとき、怖い顔してたよ」

「まじか」

思わず顔を触ると、ユメカちゃんはくすりと笑った。

「いや、でも」

「ユメカノートに、『そうだんにのる』っていうのがあるの。だから大丈夫」

渋る俺に、ユメカちゃんはノートを開いて、あるページを見せてくれる。そこには、言った通りのことが書かれてあった。ユメカちゃんは、まかせてとでも言いたげに力強く頷いた。

「…：クラスに、同じ名前のやつがいるんだ」

真っすぐな眼差しに負けて、気が付いたら話し始めていた。短冊を取り出して、自分の字を指でなぞる。

「そいつ、なんでもできてさ。同じ名前ってだけ、めっちゃ比べられんの。『同じユウタなのに』って」

くしやりと、短冊の端が歪む。自分のついたため息で、思ったより感情がこもってしまったことに気づく。こんなの、小学生に話すことじゃない。

ごまかすように、慌てて笑顔を作った。

「それで俺が勝手に嫉妬して、そいつと上手く話せなくなっちゃったってだけ！ 自業自得みたいな感じ」

ユメカちゃんは何も言わずにノートに視線

を落としました。俺たち以外はいないから、途端に静かになる。何を言っているか分からなくて、口を開いては閉じることを繰り返した。窓の外では、雨が降り続いていた。

「分かった！」

しばらくして、ユメカちゃんは急に立ち上がって、俺をビシツと指さした。困惑している俺を置いて、意気揚々と話す。

「優太くんは、比べられるのも悲しいんだよ。それに、その同じ名前の人が、否定してくれないのが悲しいんじゃないかな」

「悲しい……」

「そう、悲しいの」

ユメカちゃんの言い切った言葉が、ストンと胸に落ちてくる。

比べられるのも、否定してくれなかったのも、悲しい。訳の分からないものだと思っていた感情の名前当てられて、モヤモヤが少しだけ軽くなった気がした。

「優太くんはどうしたいの？」

「ちゃんと謝って、楽しく笑って話せるようになりたい」

はつきりとした答えに満足したのか、ユメカちゃんは嬉しそうに笑った。それから、俺の手元をじつと見つめた。俺が首を傾げると、ユメカちゃんは抱えていたノートをおもむろに差し出した。

「短冊、書き直さなきゃ。これに書いていいよ、後で貼り付けよう」

「別にこれでもいいと思うんだけど」

そう言うのと、ユメカちゃんは不満そうに頬を膨らませた。

「優太くんはその人と対等な関係になりたいんだよね」

頷くと、ユメカちゃんは得意げな顔になった。

「だったら、もつといい言葉知ってるよ」

ユメカちゃんは内緒話をするように、こそつと耳元でささやいた。胸ポケットからボールペンを取り出して、その言葉をそのまま、受け取ったノートに書き写す。

友達になる。

カラフルでも、たくもない、頼りなさそうな文字。遠くから見たら、きつと何て書いてあるのか見えないだろう。でも、心の中で読み返すたびに、これ以上の願い事はない気がしてきた。

ユメカちゃんはそのページを破ったが、直後しまったという表情になった。

「ほさみ持ってない！ あ、のりも持ってない！」

その様子が可笑しくて、思わず笑ってしまった。ユメカという少女のことを、この二日間でたくさん知れた気がする。ちよつと強引なところも、ちよつと抜けているところも、真つすぐに前を向いているところも。

リュックを開けて、筆箱を取り出す。そしてその中から、はさみとのりを出した。ユメカちゃんは「おー」と感心した声を上げて、拍手をした。

「さすが高校生だね」
「だろ？」

二人で顔を見合わせて、ケラケラと笑い声をあげる。
千切ってもらった紙を短冊サイズにして、前の願い事にかぶせるように貼り付けた。不格好だけど、これなら叶いそうな気がする。そろそろユメカちゃんのお母さんも来るというので、一階に下りる。

持っていた短冊をユメカちゃんの短冊の近くに飾る。ユメカちゃんの短冊の周りが、少しにぎやかになった気がした。
「ユメカちゃん、本当にありがとう。相談にまで乗ってくれて」

「私も楽しかったよ！　こちらこそ、お話ししてくれてありがとう」

ペこりとユメカちゃんは頭を下げる。ふと、バックの持ち手部分にタグがあることに気が付いた。オレンジ色に縁どられたケースの中には、「斎藤夢叶」と書かれてある紙がある。自分の口元が緩むのが分かった。なんてぴったりの名前なんだろう。

「優太くん、またね」

「じゃあね、夢叶ちゃん」

いつの間にか、雨は上がったみたいだ。

教室にはほんの数人しか残っていない。その数人の中には、多田もいた。自分に席に手をついて、深呼吸をする。ちゃんと、多田と向き合わなきゃ。

「渡辺、話いい？」

急に話しかけられ、驚いて顔を上げた。多田だ。落ち着かせた心臓が、また早くなる。言わなくちゃ。ちゃんと謝らなきゃ。

俺が息を吸ったところで、多田が頭を下げた。

「ごめん」

「え」

突然の謝罪に戸惑う。謝るのは俺の方なのに、なんで多田が頭を下げているんだ。

「最近、僕のこと避けてるのって、同じ『ユウタ』でいじられるからだよね。ああいうの、どうやって反応したらいいのか分からなくて。でも、それで渡辺のこと傷つけたなら、謝らなきゃって……」

「多田は悪くない！」

思わず大きな声を出してしまう。多田は目を丸くした。

「俺が勝手に気にしただけだから、本当に多田は悪くない」

「でも、比べられるのって気持ちいいものじゃないし、僕がすっかりとした反応ができてたら……」

だから、と言って再び頭を下げた。違うと言いかけて、口をつぐんだ。それから小さく息を吸って、同じように頭を下げる。

「俺もごめん。多田に嫉妬して、避けるなんて子供みたいなことをして」

そう言い切ると、胸がすっきりとした気がした。やっとと言えた。顔を上げると、不思議

そのような表情の多田と視線が合う。

「嫉妬？　なんで？」

「え？」

二人で首を傾げ合う。多田は困惑した顔のまま、口を開く。

「急に話振られたときとか、反応を求められたときとか、上手に言えなくて。そういうときに渡辺だったらって話になるんだ。それが嫌だったのかなって思ってたんだけど、もしかして違う？」

「俺は勉強とか、運動とか、多田はあんなにできるのになって言われて、それで……」

多田は驚いた顔をしている。何も知らなかったっていう顔だ。じゃあ、「同じユウタなのにな」という言葉は、俺を下げ、多田を上げるためのものじゃなかったってことか。自分だけが下げられていると感じて、勝手に嫉妬して、落ち込んで。

「まじか」

比べられていたことには違いはないけど、大事なところを勘違いしていた。どっと疲れて、椅子に座り込む。

「明日言おう。確かに同じユウタだけど、全然違うんだから比べるなって」

多田がそんなことを言うと思わなくて、数回瞬きをした。多田のイメージが崩れていく音がして、声を出して笑ってしまう。

「変なところで強気だね」

「僕は何も思わないけど、渡辺は嫌なんですよ。だったら言わなきゃ」

夢叶ちゃんのような少し強引な言葉。その真つすぐさが、心地よかった。「友達」が嫌がってることを、見過ごしたくなくはないよ」

息を呑む。頭の中で、あの不格好な短冊が揺れた。「友達」と多田が言い切ってくれた。そうか、友達って思ってた。自分で自分の顔が緩むのが分かった。

多田は「ガツンと言うから」と似合わないこと言いながら、力こぶしを作ってにっと笑った。初めて見た表情だった。その顔が、夢叶ちゃんと重なった気がした。

「週末、空いてる？」

多田は一瞬不思議そうな顔をした後、首を横に振った。

「何もないよ」

「じゃあ、七夕祭り行かない？ 祭りって言うっても公民館のだけど」

多田は子供みたいに顔を輝かせて、すぐに頷いた。こういうのが好きなのかもしれない。また、新しい顔を知った気がする。

いや、今まで意識してこなかったから、分からなかっただけかもしれない。夢叶ちゃんのように、周りをじっくりと見たのなら、新しい発見をできるかもしれない。

「多田、公民館には傘持って来いよ」

帰りの準備をしながら、ふと思いついてそんなことを言った。

「いいけど、なんで？」

「それはもちろん……」

三階にきれいな景色を届けるために。でも
ここで言ってしまったのはもったいない気がし
て、内緒、と言いつつ直して笑った。
二人しかいない教室は、いつの間にか夕焼
け色に染まっていた。